［研究報告］

琉球弧の重層性を歴史・文化・社会・文学の観点から読み直す

与那覇恵子（研究代表者）

1　はじめに

鈴木智之・中生勝美・与那覇恵子による本プロジェクトのテーマは「琉球弧の重層性を歴史・文化・社会・文学の観点から読み直す」である。琉球弧は、「日本」という場を相対化するとともに日本とアジアの関係を再考する起点となりうる、という認識からこのテーマが選ばれた。それらの関係性を深く掘り下げるために、本プロジェクトはまず「琉球弧」への視点の問い直しから始めた。沖縄本島と先島の関係を再構築することを目的に、現地での実地調査を中心に資料の収集を積極的に行なった。

本プロジェクトの大きな目標の一つは琉球弧の重層性を問い直すことであるが、もう一つは「沖縄研究」を本学の教育カリキュラムの中に位置づけられるかどうかの可能性を見ることである。そのため本研究会は、様々な領域にわたる〈沖縄〉と接触することも試みた。

以下に2008年度の「研究会活動記録」の大枠を記し、与那覇の研究テーマである文学作品と沖縄の文化・歴史の関係についての問題を霊魂観の観点から捉えた「沖縄文学にみる死者の存在」と、中生の研究テーマである歴史と社会の関係を自然災害の観点から捉えた「八重山の明和大津波と台湾離島の影響」を、研究ノートとして付し報告としたい。

2　研究会活動記録

1）沖縄本島調査：4月30日－5月3日

沖縄の基層は日本文化圏に属しながら、その地理的・歴史的・政治的な状況から千島弧・本州弧とは異なる独自の歩みを辿ってきた[(1)]。現代の沖縄は、琉球王国の文化ばかりでなくそれ以前のグスク時代・三山時代の文化[(2)]も残っているが、負の遺産として沖縄戦の戦禍とその後のアメリカによる占領、さらに復帰後も続く日本で最大の米軍基地の問題も抱えている。

多様な歴史と文化、政治状況を再確認するために、①三山時代の城跡勝連城を見学し、勝連城の歴史的意義についてうるま市教育委員会文化財係宮城伸一氏にインタビュー、②伝統的工芸品芭蕉布と長命で名高い国頭村喜如嘉で住民に生活について聞き取り調査、③首里王府の最高御嶽である斎場御嶽を見学、④沖縄平和歴史資料館と平和の礎を見学し文献資料を収集、⑤『母の遺したもの』（高文研、2000年）で座間味島の集団自決の問題を著した沖縄女性史家宮城晴美氏に女性の観点から考える「集団自決」についてのインタビュー、を行なった。

2）シンポジウム「女性と戦争Ⅳ」：6月28日　於：明治学院大学

太平洋戦争で国内の唯一の地上戦を体験した沖縄では、日本軍が駐留していた場所で住民が捕虜となることを避けるために住民同士が殺し合う「集団自決」が起こった[(3)]。「集団自決」に軍が関与したかの問題は2007年の文部科学省による教科書検定と、『沖縄ノート』の発行者岩波書店と著者大江健三郎氏に対する裁判[(4)]で注目された。軍命令ではなかったとする文部科学省や裁判の原告側の根拠とされたのが、前述した宮城氏の『母の遺したもの』と林博史氏の『沖縄戦と民衆』（大月書店、2001年）である。表現したテキストが表現者を無視して不当に扱われてしまった状況をテクスチュアル・ハラスメント[(5)]と考え、その背景を明らかにしようと与那覇コーディネートによる「女性と戦

争Ⅳ　沖縄集団自決訴訟とNHK番組改変訴訟」のシンポジウムを、日本ペンクラブ女性作家委員会、明治学院大学沖縄文学研究会、明治学院大学国際平和研究所、本学現代史研究所の共催で開催した。

シンポジウムの表題は、次の通りである。

第一部　講演「表現をめぐる圧力」

・“自決”という名の加害性ージェンダーの視点から見えてくるもの…宮城晴美氏

・なぜ“集団自決”が引き起こされたのかー教科書検定によって歪曲された研究成果…林博史氏

・NHK番組改ざん事件と歪められた記憶…西野瑠美子氏

第二部　パネルディスカッション「表現の危機の現状にどう向き合うか」

3）沖縄本島と座間味島調査：9月1日－3日

「集団自決」訴訟の問題でも明らかなように、沖縄における「戦争の記憶」は曖昧である。「沖縄の記憶」に近づくため、沖縄戦を描いた丸木位里・丸木俊夫妻の絵を展示している普天間基地に隣接する佐喜眞美術館を見学し館員にインタビューを行なった。宮城晴美氏の出身地で「集団自決」があった座間味島を訪れ、生き残った人々から地道に聞き取り調査を行なっている宮里芳和氏に関連場所を案内して貰いつつインタビューを行なった。「集団自決」の記憶に関する住民同士の齟齬が、今後さらに解明すべき問題だという貴重な提案があった。

4）法政大学「沖縄ドキュメンタリー映画祭」に参加：10月11日

宮古島や石垣島、西表島などの先島は、沖縄本島とは微妙に異なった歴史を辿っている。この映画祭では先島を舞台にした映画や祭祀を収録したフィルムが多数上映された。上映後のシンポジウムでは変容しつつ、あるいは消えつつある祭りについての問題が多数報告された。

上映作は「ナナムイー第２章ユークイ編」「竹富島種子取祭」「石垣川

平のマユンガナシ」「ユークイ～祈りの島　宮古・池間島」「島語り　島の声～ユークイの島2001年」「島語り　島の声～狩俣の祭祀は今」で、六人のパネリストによるシンポジウムは「変わりゆく島ー祭祀の記録から」であった。

5）宮古諸島と沖縄本島調査：10月31日－11月5日

宮古島・池間島・伊良部島・下地島では主に明和大津波跡地の調査を行なった。並行して各島の祭祀の中心地である御嶽も巡った。また前述した「映画祭」のパネリストで、地元の祭祀をドキュメンタリーとして撮り続けてきた宮古放送局のプロデューサー新里光宏氏に、今後の祭祀の在りようについてインタビューを行なった。宮古博物館では津波と御嶽に関する文献を収集する傍ら学芸員からの聞き取りを行なった。

沖縄本島では「仮眠室」（『海燕』1985年11月号）で海燕新人賞を受賞した田場美津子氏、「戦い、闘う、蝿」（『沖縄短編小説集2』琉球新報社、2003年）で2000年度琉球新報短編小説賞を受賞したてふてふP氏、「アイスバー・ガール」（『沖縄文芸年鑑』沖縄タイムス社、2004年）で新沖縄文学賞を受賞した赫星十四三氏に、沖縄で書くことの意味を中心にインタビューを行なった。

中国北京故宮博物院所蔵の、かつて琉球王国が中国皇帝に献上した琉球の美術工芸品の数々が展示された沖縄県立博物館の開館1周年記念博物館特別展「甦る琉球王国の輝き」を見学。中国との関係は沖縄の歴史・文化を知る上で欠かせないものである。

6）本学での特別講義：12月22日

法政大学沖縄文化研究所特別研究員得能壽美氏を招いて、沖縄本島とは異なる生活環境に置かれた先島の人々の生活を「琉球近世の社会像と多島嶼社会（海域）における海と島々の共生」という観点から講義して頂いた。起居する場のある島と労働する/働く島を行き来して暮

らしていた八重山諸島の人々の生活空間は、海が「海上の道」となる〈沖縄〉の多様性を示すものであった。

3　研究ノート「沖縄文学にみる死者の存在」

1）はじめに

〈沖縄〉という場について考察しようとする時、無視し得ない問題がその死生観である。沖縄諸島では一般的に人は死によって社会的存在としての機能が終焉するのではなく、死後も現世の人々との繋がりが続くと考えられている。死者は死後、一定の時間を経て祖霊（ウグヮンス）となり、家族の健康、繁栄、安全などを守る守護神になる、とされる。しかし、守護を受けるには家族は位牌（トートーメー）を拝み、先祖の供養（御願）に努めなければならないとされ、御願不足（ウグヮンブソク）の場合には、病気や災難などの祟りがあるとされる(6)。

沖縄におけるこのような生者と死者の関係、とくに先祖による〈救済と抑圧〉は沖縄の現代文学でさまざまに表現されている(7)。一方、戦場の地となった沖縄には供養されないままさまよう死者が「幽霊(ユーリー)」となって出現したという話も多い(8)。一般的にヤナジニ(嫌な死に方、不慮の事故死など）した者の死霊（シニマブイ）は祟るといわれるが、最近ではその言い伝えを覆す作品も現われている。沖縄の基層文化ともいうべき生者と死者との関わりを描いた小説をみていくことにする。

2）琉球弧の死生観を理解するために－マブイの存在

沖縄では人のもつ霊魂のことをマブイ、マブリ、マブヤーという。加藤正春氏によると「マブイは人の生命原理であり、この順調な機能によって人は日常生活をつつがなくおくることができると考えられて」おり、「人は普通複数のマブイ」を持っているという(9)。さらに「マブ

イは身体から遊離する性質をもち」「マブイが遊離すると人は衰弱し、病気や事故にあう」とされる。身体から遊離したマブイはマブイグミ（霊魂を身体に込める）という儀式を行なって身体に戻すが、マブイが戻らない時は死を迎えることになる。マブイは大きく生者に宿るイチマブイと、死者に関わるシニマブイがあるとされる。

マブイが身体から遊離する現象をマブイを落とすともいうが、マブイを落とす話をユーモラスに語った作品に又吉栄喜の芥川賞受賞作「豚の報い」（『文学界』1995年11月号）と、池上永一「マブイの行方」（『Seven Seas』1998年5月号）(10) がある。「豚の報い」ではスナックの中に豚が侵入してきたためびっくりしたホステスの一人がマブイを落とし、「マブイの行方」では一九歳の少女が島のしきたりに逆らって強行した宴で七つのマブイを落とす。マブイを取り戻すために奔走するというのが骨子であるが、どちらも1990年代の沖縄を舞台にしており、マブイは落ちたり込めたりするものだと認識されている。

一方、死者のマブイに対しては、マブイが心安らかに後生（グショー）に行けるようにとマブイワカシという儀礼が行なわれる。この儀礼を執り行なうのはユタとよばれる民間巫者である。恐山のイタコのようにシニマブイがのりうつったユタは「死者になり代わって死の原因や現在の心境、遺族にたいする思いを述べる。そうすることによって死者はイチミ（現世）にたいする思いがすべて解消し、心残りなくグショーへ行けるのだ」(11) という。

白石弥生の琉球新報短編小説賞受賞作「迷心」（『琉球新報』1987年1月4日）には、ユタの存在に疑問を抱く長野から沖縄に来たヤマト嫁 (12) が登場する。故郷の母の死を契機にユタに接近した彼女は、ユタから「内地と沖縄の習慣」の違いを次のように聞かされる。

> 「ひとくちに言えば、向こうは葬式や法事や盆に、坊さんにお経あげさせて、お前は死んだのだからあきらめてはやく成仏しろって、

あたまから抑えるわけ。いくらこの世に心残りがあっても、早くあちらに行きなさいって追っ払ってしまう。金持ちの家なんか、葬式にも何名も坊さん頼んでお経あげさせるけど、坊さんの数が多ければ多いほど霊を強く抑え込んでしまうから、却ってかわいそうなことしてるよ。そこへいくと沖縄は、ユタに頼んで、霊がこうしたい、ああしたいと言うことを聞いてあげるわけ。それから、さあもういいでしょ、これで気がすんだら心おきなく彼岸に行きなさいって、やさしく送ってあげるようになってるわけ」(13)

ユタにも得意分野があり、この小説におけるユタはマブイワカシの儀式を行なわないが、話を聞いたヤマト嫁の心は母のマブイを口寄せするユタを求めるようになっている。ヤマト嫁であろうと、死者の霊を安らかに彼岸に送りたいという思いは、琉球弧の人々と同じなのである。

南の島の少女がユタになる成巫過程をユーモラスに描いた小説『バガージマヌパナス　わが島のはなし』（新潮社、1994年）で、ファンタジーノベル大賞を受賞した1970年生まれの池上永一の作品には、マブイが溢れている。『風車祭（カジマヤー）』（文芸春秋、1997年）の「あとがき」には「私もまたマブイを落とした経験を持つ。」「マブイを喪失していると知ったときの衝撃は、どうして私が生きているのかという疑問につきた」とある。藤原理加「BIOGRAPHY作家・池上永一の作られ方」にも、高校時代の通学路でマブイを落とし「ユタにマブイ籠めをしてもらう」（『野性時代』2008年9月号）と、記されている。マブイを肯定する池上の心情は、死者と交流する祭である「十六日祭（ジューロクニチ）」と「清明祭（シーミー）」について語った次の言葉にも明らかで、それは琉球弧の信仰心につながるものであろう。

死者と生者がともに酒をかわすと、不思議と自分の命が死後も続いていくことを確信できる。僕はひとりの人間である以上に、ひ

とつの連鎖する魂の流れのなかにいる。肉体はやがて枯れるが、魂は亀甲墓の子宮に帰り不滅の存在になる。(『やどかりとペットボトル』河出書房新社、2006年、125頁)

ところで、死後、一定の供養を経て個々のマブイは消失し、祖霊となるといわれている。祖霊は前述したように子孫の守護神となる。「神になった祖霊は、決して幽霊になって現われたり、子孫に病気などの災害をあたえることはしなくなる」(「祖霊」『沖縄文化史辞典』東京堂出版、1972年)という。先祖の霊と祖霊の相違は明確ではないが、先祖の霊は祖霊以前の個のマブイを有している霊のようである。子孫に祟らない、子孫の繁栄を願う祖霊になることが琉球弧の人々の願いであるようで、そのためには先祖の声を聞き、きちんと供養することが必要とされる。ユタの弊害は様々に説かれている[14]が、先祖の霊と交流し、先祖の霊の声を伝えるユタが必要とされる所以である。さらに、供養されないマブイの声を聞くのもユタの職能とされている。池上永一の『バガージマヌパナス』には、祭る者のいない霊の声を聞くユタとなるべく訓練される少女が登場する。

幼い頃から霊感の強かった綾乃は19歳。考えたり悩んだりすることが嫌いな性分の彼女は、島でノンビリと過ごすことに満足していた。ある日「ユタになりなさい」という神のお告げを受けるが、それを拒否して神とのバトルを繰り広げる。ユタになる人間は悲惨な体験をした者が多いといわれているが、綾乃の場合は神とのバトルがその試練となっている。試練を経てユタになることを承諾した彼女は、最後に誰にも顧みられることのないマブイが光となって消失してしまう虚無空間を目の当りにする。そこで彼女は祖母のマブイに出会い、ユタの役割を聞かされる。

「今の現世の人たちは、見えるものばかりを信じていて、誰も私たちを振り返ってはくれないの。それを人々に伝えるのがユタの

役目なんだよ。ユタが私たちの世界と交信することで多くのこの世界の人たちが救われるんだよ」（194～195頁）

この小説では先祖のマブイになれずに光の渦に消えてしまうマブイを救う存在としても、ユタは造型されている。生者と死者の個々人の魂の悲しみや痛みを聞く者としてのユタである。

ところで前述した「マブイを落とした」という現象は、精神医学的な見地に立てば心身症と見なされるものでもあろう。それゆえに精神医学的には治療を必要とされるケースであるかもしれない。だが沖縄では、その症状をユタが救っていると言えるのかもしれない。実際に沖縄では医学的な処方をしつつユタの力も借りて治療を行なっている所もある[15]。

さて、綾乃が救うのは個人のマブイであるが、そのマブイはやがて「祖霊」となる。池上の『風車祭』は、八重山らしき島を舞台にして現世でマブイを落として右往左往する者たちと二百四十年以上もマブイだけになってさまよう者との交差を通して〈マブイとは何か〉を問う。小説のなかのオバァの答えは次のようなものである。

「マブイはその人の性格を含んでいるけど、それは現世でできた便宜的な色の違いにすぎないんだよ。マブイの本質は人格を越えた巨大な宇宙さ。時代や場所が変わっても、おまえとおまえの家系に流れている永遠の空間だよ」（177頁）

「家系」とはある意味で、一定の土地（空間）に根ざしてきた者たちの謂であろう。その意味で池上永一の捉えるマブイの観念は、広くその土地の歴史や文化をも包摂したものであるといえる。それ故にこそ祭る者のいないマブイをユタは救うことができるのである。島のアイデンティティとマブイの観念は深く結びついているといえる。

一方、沖縄戦の記憶がマブイの観念にゆらぎを与えつつ、ユタではない〈島宇宙〉がマブイを救済する世界の可能性も表現されている。

3）沖縄戦の場－現世をさまようマブイ

沖縄本島は、現代も〈霊の島〉といえる。川村湊氏の「沖縄のユーリー」には、沖縄の各地で「霊」に出会ったという体験話がいくつも紹介されている。そこで多く紹介されているのは「怨み」を残して死んだ者たちの霊の話だが、小説世界はまた異なった位相をみせる。

大城貞俊『記憶から記憶へ』（文芸社、2005年）は、沖縄戦に関わる三つの話をオムニバス形式で表現したものである。その「第二部面影（ウムカジヌ）の立てば」には、「呆けたかもしれない」といわれるトーカチ（八十八歳の祝）を迎えた女性の戦中から戦後の一生が、彼女の語りで展開される部分がある。日本兵との間に生まれた子供たちを育てるために、時には同じ沖縄の女性をアメリカ兵に売ったこともある加那。そんな加那は祝の場でたくさんの亡霊に会い、次のように思う。

> なんだか私も、戦争が終わってから、すぐ亡霊になったような気がする。戦争のときに、本当の私は、死んだんじゃないかね。戦争が始まったら、私のマブイは、私を嫌いになって逃げ出したのではないかね。私は、マブイに捨てられたことになるのかね。そうだとしたら、悲しいね……。（108～109頁）

加那はさらに沖縄戦を体験しつつ「生き延びてきた人」は「人の道を外した過去」を持つという。しかし、子どもたちを欺き、「マブイに捨てられ」るほどの「人の道」に外れた過去も、祝の最後の大きな拍手を「生き延びてきた私の過去を、みんな許してくれているんだ」と受け取り、肯定する。おそらく「みんな」の中に加那のマブイや死んだ者たちのマブイも含まれているのだろう。ユタではなく、共同体が祝うトーカチの場が〈マブイ〉を救っているといえようか。

目取真俊の芥川賞受賞作『水滴』（文芸春秋、1997年）もまた、戦後五十年を戦争の記憶を偽って生きて来た男の話である。戦後五十年のある日、徳正の右足は「冬瓜（すぶぃ）」のように膨れる。この小説にマブイと

いう言葉は出てこないが、〈すぶい〉はマブイを連想させる。人は複数のマブイを持つといわれており、肩や胸などにやどるとされている[(9)]。右足にやどって冬瓜のようになる可能性もあろう。そして冬瓜のように膨れた右足から滴る水を飲みに、沖縄の壕で死んだ兵隊たちが夜毎現われるようになる。何も語りかけず感謝するように水を飲む兵隊たちの姿にやがて徳正は圧迫感を覚える。さらに自分が見捨てた戦友石嶺の出現で「怯えや自己嫌悪」にも陥るが、石嶺の微笑みで「ふいに怒りが湧」く。

「この五十年の哀れ、お前が分かるか」

石嶺は笑みを浮かべて徳正を見つめるだけだった。起き上がろうともがく徳正に、石嶺は小さくうなずいた。

「ありがとう。やっと渇きがとれたよ」(44頁)

その夜を境に徳正の足はもとに戻る。〈すぶい/マブイ〉は、死んだ兵隊たちを癒したばかりでなく、徳正の抑圧された記憶をも救ったように思える。しかし、徳正の語られなかった戦争体験は今も語られること無く、徳正の日常ももとに戻っただけである。小説の最後は次のように閉じられる。

草を薙ぎ払いながら進むと、仏桑華の生垣の下に、徳正でも抱えきれそうにない巨大な冬瓜が横たわっていた。濃い緑の肌に産毛が光っている。溜息が漏れた。軽く蹴ってみたが動きもしない。親指くらいもある蔓が冬瓜から仏桑華に伸びている。長く伸びた蔓の先で、黄色い花が青空に揺れていた。(49～50頁)

ここで、「冬瓜(すぶい)」をマブイの象徴として捉えるなら、マブイは沖縄の自然の中から生まれる、あるいは自然に帰るものだと考えてもよいだろう。目取真俊は沖縄の現在のコスモロジーを捉えるために様々なマブイを描いている。

『魂込め(まぶいぐみ)』(朝日新聞社、1999年)には、幼い頃から魂をよく落とし

た男が登場する。乳飲み子のとき戦争で両親を失った幸太郎は子供の頃には年に五、六回、成人しても年に二、三回はマブイを落としてきた。五十歳過ぎてマブイを落とした幸太郎の体にはヤドカリ（アーマン）が入り込む。村一番の神女（かみんちゅ）（共同体の祭祀を司る巫女）で、幸太郎のマブイを見ることができるウタの力をしても「魂込め」はうまくいかない。幸太郎の身体は日ごと衰弱し、アーマンは巨大化していく。そして幸太郎の肉体が死んだとき、マブイも砂浜に消えていく。ウタはアーマンにとどめを刺そうとしたとき、その目に幸太郎の母の霊を感じる。八重山にはアーマンが島を創ったという創生神話がある。マブイを落とした衰弱した体には悪霊がつくともいわれているが、アーマンはその象徴なのか。それとも子供を自分のもとに呼び寄せたいと願う母の霊なのか。すべての謎を宙吊りにしたまま小説は「祈りはどこにも届かなかった」と、閉じられる。

異常な死に方をした死者は生者に不幸をもたらす[(9)]ともいわれているが、死者のマブイも生者のマブイもともに救うことができなかった島共同体の現在が、ここに描かれているともいえよう。戦後、沖縄のコスモロジーが明らかに変容したことを、この小説は語っているようである。

「伝令兵」（2004『群像』10月号）には、都市伝説の一種ともいえるユーリー（幽霊）が登場する。この小説の現在は2000年代だが、コザの街に顔のない伝令兵（鉄血勤皇隊）が出現するという噂が1970年代頃からあったという設定になっている。伝令兵の噂に懐疑的であった金城は、米兵といざこざを起し、逃げる途中で、伝令兵に助けられる。伝令兵は死んだことを知らないままにさまようマブイだが、使命を果たすためにその地にいるという意味で、呪縛されてはいるがその土地に居場所をもつマブイでもある。もっとも未だ戦争が続いている島であることを象徴するマブイであるともいえよう。

4　おわりに

現代の沖縄文学に描かれるマブイの世界は、池上永一に代表されるような基層文化として流通してきた琉球弧のコスモロジーと深く結びついた世界と、目取真俊に代表されるそのコスモロジーが戦争や戦後のアメリカ・日本との関係で変容してしまった世界の二極に分かれるようである。

死者と共生する琉球弧という空間がどのように変容しているのか。沖縄の基層文化と強く結びついた小説をさらに分析し、その背景を明らかにしていくことを、今後の課題としていきたい。

注

1. 島尾敏雄は日本をネシア（島々）の連なりと考え、大きく「琉球弧」「本州弧」「千島弧」の三つの文化圏が共生する空間「ヤポネシア」と見做した。詳細は島尾敏雄編著『ヤポネシア序説』（創樹社、1977年）、『島尾敏雄対談集ヤポネシア考』（葦書房、1977年）参照。
2. 高良倉吉氏は琉球弧の歴史を沖縄本島と先島で区別しているが、琉球・沖縄の歴史は「先史時代」「グスク時代～三山時代」「古琉球時代」「近世琉球時代」「近代沖縄時代」「戦後沖縄時代」に分類している。高良倉吉他編『沖縄歴史地図』（柏書房、1983年）、高良倉吉『琉球王国』（岩波新書、1993年）参照。
3. 「集団自決」という言葉の意味については、石原昌家「イデオロギーの問題となった集団自決という言葉の意味」（『南島文化　第30号』沖縄国際大学南島文化研究所、2008）に詳しい。今なお歴史的事実が争われている「集団自決」の問題に関する資料を纏めたものとして『「歴史と実践」第28号』（沖縄県歴史教育者会議編集、2007年8月）がある。

4. この現在も係争中である裁判については、『「歴史と実践」第28号』に収められた山口剛史「沖縄戦歴史歪曲を巡る経過と沖縄県民運動の到達点」にその経緯が述べられている。さらなる詳細は琉球新報社の *ryukyushimpo.jp/news/storytopic-101.html - 36k* を参照されたい。
5. 「テクスチュアル・ハラスメント」という言葉については、ジョアナ・ラス著/小谷真理編『テクスチチュアル・ハラスメント』（河出書房新社、2001年）参照。
6. 霊魂観には沖縄諸島各地によってさまざまな観念がみられるが、ここで述べたことは現在の琉球弧における一般的理解と考えて欲しい。琉球政府文化財保護委員会監修『沖縄文化史辞典』（東京堂出版、1972年）「先祖崇拝」の項には「祖先の霊というものは子孫の繁栄を願い、いろいろな災害から子孫を守って下さるものである。だから、その報恩感謝のために、絶えず先祖を拝まなければならぬ。また先祖というものは子孫の手厚い祭があって、はじめてあの世で安住するのであって祭る者がいなければ安住出来ない。もし、子孫にして先祖の祭を怠ったりすると、必ず先祖からの知らせがある。その知らせは子孫の病気災害となって現われるものである」と記されている。また古事記を素材にした桐野夏生『女神記』（角川書店、2008年）には、架空の沖縄の島を舞台に生者と死者の関わりも描かれている。
7. 大城立裕『後生からの声』（文芸春秋、1992年）には王府時代から現代までの、先祖と子孫の関係が描かれている。また与那覇恵子「文学を通してみる沖縄の家族」（与那覇恵子・林文編『多角的にみた家族』鼎書房、2008年）は、家族を抑圧する祖霊を扱った小説の分析である。
8. 川村湊「沖縄のユーリー」（『へるめす』1996年1月号）参照。

9. 加藤正春「マブイ（霊魂）」（『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、1983年）参照。
10. 単行本『復活、へび女』（実業之日本社、1999年）に所収。単行本は文庫化にあたり題名が『あたしのマブイ見ませんでしたか』（角川文庫、2002年）に変更された。
11. 桜井徳太郎「マブイワカシ」（『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、1983年）参照。
12. 沖縄諸島では他府県から来た「嫁」を「ヤマト嫁」という。吉江真理子『ヤマト嫁ー沖縄に恋した女たち』（毎日新聞社、1999年）参照。白石弥生氏も長野から来たヤマト嫁である。
13. 引用は『沖縄短編小説集』（琉球新報社、1993年）238頁より。
14. 沖縄の人とユタとの関係を分かりやすくまとめた著書に友寄隆静『なぜユタを信じるか』（月刊沖縄社、1981年）がある。ユタの是非については1982年2月から1983年11月にかけて沖縄タイムス・琉球新報紙上において100回近く続いた「ユタと沖縄社会」をめぐる論争が参考になる。
15. 佐々木雄司編『沖縄の文化と精神衛生』（弘文堂、1984年）参照。

参考文献

『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、1983
『岩波講座日本文学史　第15巻　琉球文学、沖縄文学』岩波書店、1996
宮城栄昌『琉球の歴史』吉川弘文館、1977
新城俊昭『新訂高等学校　琉球・沖縄史』東洋企画、2001
安里進・高良倉吉他『沖縄県の歴史』山川出版社、2004
桜井徳太郎『沖縄のシャーマニズム』弘文堂、1973
仲松弥秀『神と村』伝統と現代社、1975

「特集　ユタと迷信と祖霊信仰」『青い海』97号、1980
「特集「墓」祖先との語らい」『青い海』117号、1982
比嘉政夫『女性優位と男系原理』凱風社、1987
谷川健一『南島論序説』講談社学術文庫、1987
窪徳忠先生沖縄調査二十年記念論文集刊行委員会編『沖縄の宗教と民俗』第一書房、1988
赤嶺政信「沖縄の祖霊信仰」『沖縄文化研究17』法政大学沖縄文化研究所、1991
渡邊欣雄『世界のなかの沖縄文化』沖縄タイムス社、1993
塩月亮子「シャーマニズムと死生観」「沖縄における死の現在」『死の儀法』2008年・ミネルヴァ書房
又吉栄喜『豚の報い』文芸春秋、1996
『沖縄短編小説集』琉球新報社、1993
『沖縄短編小説集2』琉球新報社、2003